

月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙
おかげさまで今年は創刊25年目
創刊1989年 No. 286

2013年4月号



ベルヴェデーレ下宮「1630年からのバロック」展より

Bartolomeo Altomonte
Verklärung der Leiden Christi, um 1740
© Belvedere, Wien



杉本純の原子力の話 II

ウィーンと京都 19



本年二月八日、世界保健機構(WHO)が福島第一原子力発電所事故による健康リスクの評価に関する報告書を公表したのでご紹介する。この報告書は、事故後半年までに政府が公表した土壌や食品中の放射性物質の濃度などの調査結果に基づき、WHOの専門家グループがまとめたものである。報告書では、事故の被ばくによる影響は、最大限に見積もっても住民のガンが増える恐れは小さいとしている。事故当時、一歳だった女の子が被ばくの影響で生涯にわたって甲状腺ガンを発症するリスクは、通常〇・七七%であるのに対して、放射線量が最も高かった浪江町で〇・五ポイント、飯館村で〇・三三ポイント、それぞれ上昇するとしている。これ以外の市町村では、統計的に意味のあるリスク上昇は見られないとしている。リスクの過小評価を避けるため、住民が事故後四ヶ月同じ場所に住み続け、被ばくを避けるための食品規制を考慮しないなど、実際よりもリスクが高くなるような条件でも極めて安全と評価している。

報告書の作成に加わった放射線医学総合研究所の明石理事は「WHOでは、リスクの過小評価は放射線の影響を見落とすことにつな

がるため避けたいという考え方が強く、最大の被ばくをしたという想定に立つて健康への影響を評価している。実際には、住民の避難が行われたり、放射性物質が基準を超えた食べ物、物は出荷が制限されたりしたので、評価結果のような被ばくをしている人はいないと考えられる」と指摘している。その上で、「こうした過大な見積もりでも放射性物質の影響は小さいといえるが、今後も長期にわたって健康への影響について調査を続ける必要がある」と話している。

さて、今年のウィーンと京都の類似点では、両市が主催するマラソン大会について述べてみたい。ウィーンシティマラソンは、ウィーンセンター国連ビルをスタートしてドナウ川を渡り、大観覧車で有名なプラター公園内をドナウ運河沿いに走り、国立オペラ座、シェーンブルン宮殿、国会議事堂、ウィーン大学前を抜けて、王宮がゴールとなるコースである。世界で最も美しいマラソンコースと言われるフルマラソンの九千人の他に、ハーフ、リレー、子供向けの短距離コースがあり、三万五千人が音楽と芸術の都を駆け抜ける。十キロ以上にわたってモーツァルトのメロデーが鳴り響くというのがウィーンらしい。今年の四月十四日に三十周年を迎える。

一方、駅伝発祥の地・京都では、東日本大震災復興支援と京都・日本の活性化を目指して、昨年三月十一日に第10回京都マラソンが開催された。コースは、西京極運動公園をスタートし、桂川に沿っ



て、渡月橋、天龍寺、仁和寺、龍安寺、金閣寺、上賀茂神社から京都国際会館を折り返し、鴨川右岸を南下し、銀閣寺から京都大学前を往復し、平安神宮がゴールである。フルマラソンの二万四千九百人の他、ペア駅伝、車椅子競技があり、二万五千二百二十人が古都を駆け抜ける。山紫水明の自然を感じながら、送り火の五山全てを眺望できるのが京都らしい。今年は三月十日に第二回大会が開催された。ウィーンと京都のコースはいずれも、世界遺産など多くの名所を巡り景観が素晴らしいこと、フラットで走りやすいことが共通している。

余談であるが、筆者がウィーン赴任中、シティマラソンは治道で観戦するだけで、ついに走る機会はなかった。今年の京都マラソンでは福島市に住む娘が出場し、家内と治道で声援を送った。抽選倍率は約三倍であるが、来年は親娘で走ることができれば最高である。両市のマラソンを観戦できた幸運に感謝しつつ、選手がその前を走るウィーンの国会議事堂を描いたスケッチを掲載させていたたく。

■ 杉本純 京都大学教授／元原子力機構ウィーン事務所長 ■

